



営農NEWS



イネ縞葉枯病による減収対策として、ウイルス媒介虫ヒメトビウンカの本田防除を実施しましょう

イネ縞葉枯病がすでに発生している地域で、今年の田植時にウンカ類に登録のある持続効果の長い薬剤を育苗箱に施薬していない水田や、昨年、育苗箱施薬してもなお本病の発生が多かった水田では、ヒメトビウンカの本田防除を6月第3~4半旬(11~20日)頃に実施してください。

県病害虫防除所は、本年5月中旬に県西および県南地域の小麦圃場で採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫調査で、保毒虫率の高い地点が多数認められたこと、および5月24日現在の有効積算温度から計算したヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生が平年より1週間程度早いと予測されたことから、

5月25日付で「病害虫発生予察注意報」第1号を発表し、「水田でのヒメトビウンカの本田防除時期が早まる見込みです。イネ縞葉枯病対策のため、適期に防除しましょう」と呼びかけています。

＜防除のポイント＞

- 1 水田畦畔等で越冬し、麦畑に移動して産卵、増殖したヒメトビウンカが水田に侵入するため、周辺に麦畑がある水田では特に発生に注意が必要です。
- 2 ウイルスを媒介するヒメトビウンカを対象として、育苗箱に(薬効が長期持続する)殺虫剤を施用することが最も安定した防除効果が期待できます。しかし、育苗箱施薬を実施しなかった場合は、本田に飛来した成虫が、産卵、ふ化して発生する第二世代幼虫を対象に、本年は6月3~4半旬(11~20日)頃を中心に本田防除を実施しましょう。なお、防除に粒剤や豆つぶ剤を使用する場合は、効果が出現するまでの期間を考慮して、液剤等の散布剤より(薬剤により異なりますが)3~5日くらい早めの処理が必要です。また、施用時は湛水状態(3~5cm程度)で田面に均一に散布し、4~5日間は湛水を保ち、散布後7日間は落水やかけ流しをしないでください。
- 3 育苗箱施薬剤として IRAC コード 4A を含む薬剤(アドマイヤーCR箱粒剤、スターダム箱粒剤、ダントツ箱粒剤、デジタルメガフレア箱粒剤、ロングリーチ箱粒剤、フルサポート箱粒剤など)を施用した場合には、抵抗性害虫の出現を抑制するために、本田防除では IRAC コード 4A を含まない薬剤で防除しましょう。
- 4 遅植えのイネが本病に感染しますと、被害が大きくなる傾向がありますので、防除を徹底しましょう。
- 5 本田で発病株の抜き取りや、ヒコバエ(再生稲)を秋の早めに耕起してすき込むなど、伝染源を除去することが重要です。さらに、ヒメトビウンカの越冬場所となる冬季の水田畦畔等も常に除草して、生息密度を低下させましょう。

表1 水稲 本田におけるヒメトビウンカ(ウンカ類を含む)の主な防除薬剤(平成30年5月28日現在)

薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数	分類
MR、ジョーカーEW	2,000倍	収穫14日前まで / 2回以内	3A
スミチオン乳剤	1,000倍	収穫21日前まで / 2回以内	1B
トレボン乳剤	1,000~2,000倍	収穫14日前まで / 3回以内	3A
アドマイヤー1粒剤	3kg/10a	収穫7日前まで / 2回以内	4A
ダントツ粒剤	3kg/10a	収穫7日前まで / 3回以内	4A
スタークル豆つぶ	250~500g/10a	収穫7日前まで / 3回以内	4A

注) 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

※ この時期、本田におけるイネ置き苗の処理を徹底しましょう

置き苗は、本田におけるいもち病の重要な伝染源になる可能性が高いため、補植作業を終えたら速やかに処分してください。なお、処分するときは水田より引き上げて放置するのではなく、土中に埋めるなど苗が枯れて、いもち病斑を形成しないようにすることが大切で、遅くとも6月中旬までには終了させてください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



JA全農いばらき

生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040